

大学生の対人ストレス場面における認知的評価と対処行動

—自閉症スペクトラム指数の違いによる検討—

専攻 学校教育学専攻
コース 臨床心理学コース
学籍番号 M11057A
氏名 田中翔

問題と目的

大学内において発達障害や発達障害と同様の特徴を持つ学生への理解を深め、支援体制を整える必要があることが指摘されている(山本・高橋, 2009)。発達障害の中でも、注目を集めているのが自閉症スペクトラム障害(Autistic-Spectrum Disorder;以下 ASD と表記)である。ASDを持つ人は、社会性、コミュニケーション、想像力の3つの障害を持つため、対人場面において困難を抱える場合が多い(岩田ら, 2004)。若林ら(2004)は自閉症スペクトラム仮説に基づき、健常な知能の成人を対象とした自閉症傾向の個人差を測定するための自己回答形式の質問紙AQの日本語版を作成した。このAQにより、自閉症のアナログ研究が可能となった。

本研究ではAS傾向を持つ大学生を対象に、ストレスを生じやすい対人場面(以下対人ストレス場面と表記)での認知的評価、対処行動、ストレス反応について量的(研究Ⅰ)、及び質的(研究Ⅱ)に検討することを目的とする。

【研究Ⅰ】

方法

目的 AS指数の高低とサポート人数の違いにより、大学生の対人ストレス場面における認知的評価と対処行動、および気分状態にどのような違いがみられるか検討する。

調査協力者と手続き 2012年6月～10月に大学生、専門学校生203名(平均18.8歳, SD=1.04)を対象に質問紙調査を実施した。

調査材料 ①フェイスシート

②日本語版AQ(若林ら, 2004): 50項目 金井(2010)にのらひ75パーセンタイル(25点以上)を高群(n=50), 25パーセンタイル(15点)以下を低群(n=49)とした。

③サポートネットワークサイズ(塩崎ら, 2006): 1項目

サポート人数4名以上を高群(n=74), 3名以下を低群(n=25)とした。

④～⑥については、対人ストレス場面2つを提示し、各場面を想定してもらひ回答を求めた。

④日本語版PANAS(佐藤, 2001): ネガティブ情動困8項目を用いた。

⑤認知的評価尺度(加藤, 2000): 9項目3下位尺度

⑥日本語版BriefCOPE尺度(大塚, 2008): 28項目14下位尺度

場面1: あなたは体調が悪く、必修の授業を3回休んでしまいました。体調が良くなったある日、その授業を担当している教員から呼び出されてしまいました。あなたはこの教員とは一度も話したことはありません。今日中に教員の研究室まで行き、事情を説明しないと単位は認めてもらえないようです。

場面2: あなたはこの4月からグループワークを行っている授業に参加しています。授業の終わりにグループごとに誰かが発表しなければいけません。あなたは前回前回と授業に遅刻してしまい、グループのメンバーに「次遅刻したら、この先ずっと最後の発表をしてもらおうよ。」と言われてしまいました。明日その授業がありません。

分析方法 AS高群とAS低群でサポートネットワークサイズに差があるか調べるため、t検定を行った。さらに場面ごとに、④～⑥を従属変数とし、AS傾向高低、サポートネットワークサイズ高低の群を要因とした2要因の分散分析を行った。

結果と考察

t検定の結果、AS高群はAS低群に比べ有意にサポートネットワークサイズが少なかった($t(97)=3.66, p<.001$)。これは金井(2010)のAS傾向の高い者は知覚しているサポート量が少ないという結果と一致する。

Table1 場面1 2要因分散分析結果

従属変数	交互作用	主効果	
		AS傾向	サポートネットワークサイズ
PANAS	n.s.	n.s.	F(1, 95)=3.43 高群<低群+
対処効力感	n.s.	F(1, 95)=3.61 高群<低群+	n.s.
積極的コーピング	n.s.	F(1, 95)=5.96 高群<低群*	n.s.
情緒的サポートの利用	n.s.	F(1, 95)=4.53 高群<低群*	F(1, 95)=2.69 高群>低群+
道具的サポートの利用	F(1, 95)=5.14*	F(1, 95)=12.11 高群<低群***	n.s.
感情表出	n.s.	F(1, 95)=3.72 高群<低群+	n.s.
自己非難	F(1, 95)=3.25*	n.s.	F(1, 95)=5.18 高群<低群+

p<.10* p<.05* p<.001***

Table2 場面2 2要因分散分析結果

従属変数	交互作用	主効果	
		AS傾向	サポートネットワークサイズ
PANAS	n.s.	F(1, 95)=3.89 高群>低群+	F(1, 95)=3.18 高群<低群+
脅威	n.s.	F(1, 95)=3.67 高群>低群*	n.s.
気晴らし	n.s.	F(1, 95)=4.98 高群<低群*	n.s.
情緒的サポートの利用	n.s.	F(1, 95)=4.56 高群<低群*	n.s.
道具的サポートの利用	n.s.	F(1, 95)=5.35 高群<低群*	n.s.
肯定的再解釈	n.s.	F(1, 95)=4.08 高群<低群*	n.s.

p<.10* p<.05*

分散分析の結果、場面1の道具的サポートの利用と自己非難において交互作用が認められた。それ以外の変数はすべて主効果のみ認められた。気分状態については、場面1, 2ともサポートネットワークサイズの、場面2でAS傾向の主効果が認められた。認知的評価については、場面1「対処効力感」、場面2「脅威」にAS傾向の主効果が認められた。場面1はすべきことが明確な場面、場面2はすべきことが不明確な場面である。AS傾向の高い者はそのような場面で「脅威」を感じやすいことが示唆される。対処行動については、AS傾向の高い者は、サポートネットワークサイズが少ないことに加え、「情緒的サポートの利用」と「道具的サポートの利用」というサポート希求行動が少ないことが示された。ASを持つ大学生は、1人では解決できない困難を抱えていても、その困難を他者に上手く伝えることが苦手であるため(佐々木・梅永, 2010)、たとえサポートしてくれる他者がいても、サポート希求できない可能性が考えられる。さらにAS傾向が高い者は低い者に比べて、「積極的コーピング」、「気晴らし」、「肯定的再解釈」というポジティブな対処行動が少ない結果となった。AS傾向が高い者ほど、周囲からのサポート量が少なく、対人ストレス場面をより「脅威」であると捉えやすく、対人ストレス場面

を否定的に捉えていると考えられる。

【研究II】

目的 ASDの診断を持つ者の在学時代の様子を聴取し、在学時の対人ストレス場面での認知・感情・対処行動、加えて現在までの対人場面での工夫行動について質的に検討する。

調査協力者と手続き ASDの診断を持ち大学もしくは専門学校に在学経験のある者3名に、2012年7月～12月に、関西にある就労支援施設Dにおいて、45分程度の半構造化インタビュー調査を実施した。

分析方法 インタビューのプロトコルから、「在学時の対人ストレス場面とその場面での感情・認知・行動」、「在学時の支援について」、「対人場面での工夫行動」を抜き出した。

結果と考察

Aさんの事例を示す。3名を分析した結果、対人ストレス場面で回避的な対処行動が多く、過去の失敗経験から自身の苦手な特徴を理解し、対人場面での工夫行動を持っていた。

Table3 Aさんのインタビュー結果

対人ストレス場面①		
A: あんまり知らない人を相手にすこい思っていて、それをフォローしたり聴いたり部分ですごい苦手なんです		
感情	認知	行動
すごく困るというか	同じく相手に難しい言葉をかけてあげることができないかかっていうのは考えてたんですけど、	相手の様子を見て、自分がどう理解できる範囲であれば、行動には移すと思いは、ただ見て理解できなかったら見ぬふりをするとか、同じしないで
対人ストレス場面②		
A: ちょっとさうざいのが苦手で、クラスに2人くらいいるんですけど、ちょっとヤキ一つ強い子が授業中にちょっとさうざいとかやってるのが嫌でしたわ		
感情	認知	行動
普通にうるさいなーみたいな笑	何でいるんやろって思いました。この学校に通って	タダがそもそ合わないんで、理解すること自体がないと思ひ、その例え
イラッとしてました	るんかなーみたいなことは考えていました	理解があったとしても逃げます
対人場面での工夫行動		
その場の雰囲気の中で、能動口が悪くなってたりするんで、なるべくにこういうことは思ってるけど言わないでなごうっていうのを、家に帰ってきたときなどに考えて何て言うかな、言い聞かせる、まあ気を付けるようにしようみたいな感じで、意志を固めて		
自分の言葉で結構通じてたりとかあったら思ってる、そのなるべく自分の言う言葉は探っていくとは思ひましたわ		
嫌はつかないでなごうっていうのはあって		
寝る前にちゃんと、その文章の構成をわかってから言う		
嫌に聞いてこがうって言うように説明		

【総合考察】

本研究の結果より、大学生の対人ストレス場面において、他者からのサポートを得ること、自身の苦手な特徴を理解し工夫行動を持つことがストレス低減につながることを示唆された。

主任指導教員 中村菜々子

指導教員 中村菜々子